



J R 東海労への批判ならざる批判 悪意に満ちた山口委員長挨拶②

J R 総連第 48 回定期中央委員会での山口委員長挨拶の続きです。

山口委員長は「J R 東海労は、組織展望を切り拓くと言いながら、その矛先は、関連会社プロパーの組織化とか、O B を組合員として組織化するなどに向かい、最も重要な現に J R 東海で働く若い人達を組織化するという厳しい闘いから逃げた」と述べました。

これは、事実に反します。J R 東海労は、以前から J R 本体からの組織化の方針を立てています。この方針を取り下げたことはありません。「厳しい闘いから逃げた」とは、全くの言いがかりです。J R 総連は、関連会社プロパーの組織化を断罪していますが、何が問題なののでしょうか。J R 北海道と貨物の関連会社の労働組合は組織化され、労連として J R 総連に加盟しています。北海道、貨物は良くて、J S 労はなぜダメなののでしょうか。山口委員長は、その一方で「関連会社に労働組合を作ることは、むしろ歓迎するもの」と言っています。矛盾しませんか。

ところで、J R 総連や各単組がカンパを集めてまでも支援しているセン労は、J R 本体での組織拡大は実現できるのでしょうか。年休裁判の原告となったあるセン労組合員は、打ち合わせ後の懇親の場で、しかも弁護士の前で「俺は原告になるつもりはなかった」と、本音を漏らしました。闘いの前面に立つことを嫌がる組合員が、労働運動を自ら実践するとは到底思えません。この程度の質で「東海の地に労働運動を残す」ことはできるのでしょうか。

J R 総連は、J R 東海労のやることなすこと、全てを問題にしていますが、その理由を明確にすることができません。なぜなら、J R 東海労の闘いに正当性があるからです。